

ともに手をたずさえて

第一回福音宣教推進全国会議の理解を深めるために

日本カトリック司教団

兄弟姉妹である信徒、司祭、修道者の皆さん

第一回福音宣教推進全国会議・NICE'87（以下、第一回全国会議と略します）が開催されてから二年近くの年月がたちました。この間、司教団は常任司教委員会のもとに、NICE推進委員会を設け、まず司教団が直接取り組むべき課題を選定し、社会問題に取り組むプロジェクト・チーム、信仰の生涯養成に取り組むプロジェクト・チームの二つのプロジェクト・チームを発足させ、また信仰の生涯養成を行うセンターの設立を決定し、すでに具体的な取り組みを始めています。全国各地の教会においても第一回全国会議の諸提案の実現に向けて力強い動きがみられます。わたしたち司教団はこのような実りを大変喜ばしく思っております。

しかしまだ、第一回全国会議の精神が一人ひとりの信者に十分に理解されている、とは言えません。ときには第一回全国会議についての誤解や混乱もみられます。そこで、司教団は、皆さんが第一回全国会議の理解を深めてくださることを願って、このメッセージを日本の教会のすべての人々に送ります。

第一回全国会議は司教団の指導と責任のもとに行われました

4

1 第一回全国会議は司教団が開催を決定し、司教団が主催し、司教団の責任と指導のもとに行われたものです。

司教団は一九八四年の『日本の教会の基本方針と優先課題』の中で福音宣教推進全国会議の開催を宣言し、一九八七年十一月、常任司教委員会の主催によってそれを実行しました。そこに集まった参加者は討議の結果を「答申」として司教団に提出し、司教団はそれにこたえて『ともに喜びをもって生きよう』を発表し、第一回全国会議への取り組みの決意と方向を表明したのです。

第一回全国会議はキリストと教会の教えに従ったものです

2 司教団は教書『ともに喜びをもって生きよう』によって、第一回全国会議の趣旨・精神と基本的内容はキリストの教えと教会の伝統にかなうものであることを認めました。この教書『ともに喜びをもって生きよう』は、第一回全国会議は日本の教会が第二バチカン公会議の歩みを前進させるために行われたものであることを確認し、さらに、ここで示された日本の教会の回心への決意表明は「キリストに近づき、教会の長

い豊かな信仰の伝統に沿う」ことである、「なぜなら、このような生き方こそ、キリストご自身がお始めになり、それを続けるよう教会に託されたものだからです」と言つて、第一回全国会議の正統性を宣言しています。

第一回全国会議は福音宣教への取り組みの出发点を社会の現実把握におきました

3 第一回全国会議のテーマを選定するに際し司教団は、福音宣教への取り組みの出发点を、旅する教会を取り巻いている社会と世界の現実におこうとしました。その理由は、福音の受け手である現代人の心と社会の必要を知った上で福音を伝えることが真の福音宣教である、と判断したからです。イエスご自身、「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ4・18―19）と宣言しておられます。イエス・キリストの福音宣教は、同じ人間として一人ひとりのおかれている現実にかかわりその人の必要にこたえるという福音宣教でした。このようなイエスの福音宣教の模範にならって、司教団は、生活と社会

の現実の把握に基づいて、日本の教会の福音宣教のあり方をともに探求したのです。

ところで、ここで確認しなければならぬことは、この現実把握から出発した第一回全国会議には前提がある、ということですが、その前提とは一九八四年の「日本の教会の基本方針と優先課題」です。第一回全国会議は、その「優先課題」の3として企画されたことです。そして、この優先課題は、「基本方針」の1と2、すなわち「より多くの人々を主の食卓に招く」ことと「キリストの力によつて日本の社会と文化を福音の教えに基づいた社会と文化に変革していく」ことを前提とし、その意味を深め、実現を意図して選択されたのです。

第一回全国会議は「弱い立場におかれた人々」とともに歩む道を選びました

4 福音書が伝えるイエス・キリストの生き方は、「弱い立場におかれた人々」の痛み、悲しみ、苦しみに共感し、かれらの立場に立ち、かれらとともに歩む、という生き方です。第二バチカン公会議は『現代世界憲章』において、「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事がらで、キリスト

の弟子たちの心の中に反響を呼び起こさないものは一つもない^③と述べ、キリストに従う道をわたしたちに示しました。また『信徒使徒職に関する教令』では「教会の使命は、ただキリストの福音を告げその恩恵を人々にもたらすだけではなく、この世の秩序をも福音の精神で満たし完成することである^④」と言っています。「開かれた教会づくり」はこのようなキリストと教会の教えに従ったものであり、「左傾化」した教会、俗化した教会をつくる、ということではありません。

第一回全国会議は完全無欠なものではありません

5 第一回全国会議の「答申」と『ともに喜びをもつて生きよう』は、公会議の精神にのっとりて日本の教会を刷新するために提案されたものです。だからといってその内容があらゆる問題を扱っているわけではなく、また完全無欠なものでもありません。わたしたちは皆さんのご協力によってこれをよりよいものに育てていきたいと望んでいます。ですから皆さんの自由な論議や批判を歓迎します。ただし、論議にはルールとマナーが伴います。例えば次の点に留意することが大切であると思います。

① 個人攻撃、名誉棄損になるような言論を慎む。

② 伝え聞いたうわさや印象を根拠に論議しない。できるだけ公の文書などを土台とし、かつ出典を明らかにしながら自分の主張を展開する。

③ 聖書や公会議の教えに照らし合わせながら論議する。

第一回全国会議をめぐる論議の中でも、神学や典礼に関するものは、これからの日本の教会の神学・典礼の進歩のために大切です。しかしこの場合も上記のルールとマナーを守っていただきたいと思えます。かつて教会は「異端」ということばを使っていました。しかし第二バチカン公会議を経た教会は、このことばを使うことに大変慎重になっています。みだりにだれかを「異端」ということばで呼ぶことは避けなければなりません。

失敗を恐れずに前進しましょう

6 『ともに喜びをもつて生きよう』の中で、司教団は「わたしたちは力も弱く、貧しいものです。間違ふこともあります。失敗することもあります。それを恐れてしりご

みしたくなるかもしれません。しかし、『ともに』おられる神は裁きの神ではなく、愛と救いの神です。恐れずに挑戦しましょう」と皆さんに呼びかけました。

新しい試みや刷新には失敗や行き過ぎが伴いがちです。また人間のことはや表現は不完全、不正確ですから、誤解や行き違いも避けられません。しかしわたしたちは互いに寛大な心をもってゆるしいあい、尊敬のうちと同じ神を信じている兄弟姉妹として、ともに神の国を建設するために手を携えながら前進していこうではありませんか。

なお、この機会に日本の教会の典礼の刷新について一言申し添えたいと思います。

「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉です」⁽⁵⁾。司教団はすべての信者が典礼を大切にすることを切望しています。日本の教会の典礼の刷新を遂行することはわたしたちにとつて大切な課題の一つです。『ともに喜びをもつて生きよう』は、「人々の心の琴線に触れる典礼を生み出す努力が求められ」ていることを訴えています。どうか皆さん、日本の教会の典礼刷新に力を合わせてください。ただし、典礼の刷新を行うためにはまず典礼の精神をよく学び、また現行の典礼法規の精神を理解することが必要です。全国各地で司教の指導のもとにいろいろな学習の機会がもたれることはきわめて望ましいことです。

第一回全国会議の課題を達成することは容易なことではありません。長い年月にわたる努力と祈りを要することです。わたしたちは忍耐強くこの理想を追求していく決意です。その結果は第二回、第三回……の全国会議へと引き継がれていくであろう、と希望しています。

今日まで第一回全国会議の推進に尽力くださったすべての人々に深甚なる感謝の意を表するとともに、あらためて父である神に宣教のための聖霊の恵みを祈るよう、また教会の母である聖母の取り次ぎを願うよう訴えます。

このメッセージを結ぶにあたり、皆さん一人ひとりの上に神の豊かな恵みをお祈りいたします。

一九八九年十月十九日

日本カトリック司教団

注

(1)

「基本方針1」の原文は次のとおりです。

「わたしたちカトリック教会の一人ひとりが、宣教師として、まだキリストの食卓を囲んでいない人々に信仰の喜びを伝え、より多くの人を洗礼に導き、かれらとともに救いのみ業の協力者となる。」

(2)

「基本方針2」は次のとおりです。

「今日の日本の社会や文化の中には、すでに福音的な芽生えもあるが、多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もある。わたしたちカトリック教会の全員が、このような「小さな人々」とともに、キリストの力でこの芽生えを育て、すべての人を大切にすると文化に変革する福音の担い手になる。」

(3)

『現代世界憲章』 1

(4)

『信徒使徒職に関する教令』 5

(5)

『典礼憲章』 10

『ともに手をたずさえて』

―第一回福音宣教推進全国会議の理解を深めるために― 解説

NICE推進委員会委員長

島本 要

日本カトリック司教団は、第一回福音宣教推進全国会議開催二周年を記念して、『ともに手をたずさえて―第一回福音宣教推進全国会議の理解を深めるために―』（以下、『ともに手をたずさえて』と略します）を発表しました（一九八九年十月十九日付）。わたくしはNICE推進委員会委員長としてそれを受け、この司教団文書をより多くの人々に理解していただくために、この「解説」を作成いたしました。司教団文書と併せてご利用いただけましたら幸いと存じます。

1 『ともに手をたずさえて』は何のために書かれたか

『ともに手をたずさえて』は文字どおり、教会の全信者に第一回福音宣教推進全国会議の理解を深め

ていただくために書かれたものです。その背景には、第一回全国会議一周年を迎えようとしている今、一方で力強くそれを推進していこうという動きがあると同時に、他方その正統性を否定しようとする声もあり、不安を感じている信者もいる、という事実があります。司教団は日本の教会の最高指導者として、キリストの教えを明確に示す責任をもっています。そこでこの度、このメッセージを発表して、司教団としての態度と判断をより明確にし、かつさらにこの全国会議を推進していく決意を表そうと決心しました。

2 『ともに手をたずさえて』が最も強調している点は何か

『ともに手をたずさえて』が強調している点は、第一回全国会議の基本的内容だけではなくその趣旨・精神も、キリストの教えと生き方、そして教会の伝統、特に第二バチカン公会議の教えにかなっているのだ、ということ です。第一回全国会議があたかも異端的であるかのような批判をする人もいますが、司教団ははつきりと第一回全国会議の意図、方法、進め方、そこに現れた方向性が、第二バチカン公会議の精神と方向に従ったものであることを認めています。すなわち、日本の教会という視野に立ってこれからの福音宣教の展望をつくるために、司教だけでなく、司祭、信徒、修道者が一堂に会し、同じ日本の教会の神の民として責任を担いながらも考え話し合う、という趣旨のもとに行われたのです（『開かれた教会をめざして―第一回福音宣教推進全国会議公式記録集―』の中の相馬信夫

実行委員長の趣旨説明を参照)。そのことをよく理解していただくために、司教団の教書、特に『とも
に喜びをもって生きよう』をよく学んでいただきたいと思ひます。またこの機会に司教団教書の根柢
となつてゐる聖書と公会議の教えをより深く学ぶようお勧めします。聖書はキリストをよく知るため
に、公会議特に第二バチカン公会議の教えは、現代世界における教会の生き方を学ぶために不可欠な
教えです。

3 第一回全国会議の特色は何か

第一回全国会議の特色は、課題討議の前に次のような前提をおいた、ということですが、それは、『現
代世界憲章』の精神に従い（『ともに手をたずさえて』本文4参照）、人々の生活と社会の現実に深い
関心を寄せ、そこから福音宣教を考えていく、という方向を選択したということです。つまり、「人々
はどのような問題をもつてゐるのか」「人々はどんな苦しみと悲しみを抱いてゐるのか」「わたしたち
の生きてゐる社会はどんな社会なのか」「わたしたちは社会の中でどのような役割を果たさなければなら
ないのか」などの問いを自らに向け、キリストの弟子として、この問いにこたえていこうとしたの
です。このことを理解していただければ、第一回全国会議の諸提案の趣旨も容易にご理解いただける
と思ひます。そしてそのような態度と方向は、日本の教会が作りだしたのではなく、イエス・キ
リストご自身の生き方、そして第二バチカン公会議の教えになつたものなのです。

4 キリストの生き方の特色をどのようにとらえるのか

第一回全国会議は司教団に対して十四か条の提案を行いました。それに対して司教団は『ともに喜びをもって生きよう』でこたえました。その中で、十四か条は内容においてさまざまだが基本的に同じ姿勢・方向・精神をもっていることを認め、それを「ともに」で表し、この「ともに」はこの世の中で人として生きられたナザレのイエスの生き方にならっている、と評価したのです。それは、司教団として、ナザレのイエスがその生き方の中で、特に貧しい人々、苦しみ悩んでいる人々など弱い立場におかれた人々とともに歩んだ、という点を強調しようとした望みだからです。そしてさらに司教団は「喜び」をもう一つの鍵ことばとして付け加えました。それは、人となられた神イエス・キリストの「ともに」の生き方にならうことを通して初めてわたしたちは復活の「喜び」に至ることができるとを伝えたかったからです。

5 教会の「左傾化」とは何か

一部で、最近の日本の教会は「左傾化」したのではないか、という声が聞かれます。「左傾化」とは何を意味しているのでしょうか。もし、「弱い立場におかれた人々」とともに歩むことを「左傾化」と呼ぶのであれば、その表現は適切ではないと思います。「左翼」とか「左傾」ということばは通常特定の政治的イデオロギーを表す意味で使われています。キリストの道は決してそのような特定のイデオ

ロギーに従属するものではありません。神の国の福音こそわたしたちの理想であり基準なのです。もしこのキリストの生き方を「左傾」と呼ぶのであれば、キリストも「左翼」であることになってしまいます。

6 教会は「世俗化」したのか

『ともに手をたずさえて』は「世俗化」ということばを避けて「俗化」ということばを使っています。というのは、「世俗化」には正しい意味の世俗化と間違った意味の世俗化とがあるからです。使徒ヨハネが「世も世にあるものも、愛してはいけません。（中略）なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです」（ヨハネ2・15―16）というときの「世」は罪に汚れた世界を指しています。しかし、「神はその独り子をお与えになるほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3・16）という場合の「世」は、神の創造された世界、神の救いの計画に従って世の終わりに完成されるべき世界を意味しています。神のつくられたものは本来すべてよいものでした。人々の罪が世界を墮落させたのです。イエス・キリストはこの世界の救いのために人となられたのです。正しい意味での世俗化とは、教会が、地上にあって父のみ旨を行って生きぬかれたイエス・キリストにならない、この世にあって地上の民として生きながら、聖霊に導かれて、この世を超えた神の国のしるしとなり、この世を福

音の精神に従って刷新していく、ということですが。

7 教会はなぜ社会問題にかかわるのか

教会の使命は福音宣教であり、福音宣教の目的は人々と世界の救いです。真の救いとは人があらゆる罪と悪から解放され、神と一致し、神の恵みを喜び祝うことにあります。ところで、このような救いはどのようにして与えられるのでしょうか。わたしたちは、他者とのかかわりと無関係に自分の魂の救いを考えることができるのでしょうか。この世界の中で人々が苦しみあえいでいるとき、自分だけの救いを考えてよいのでしょうか。第二バチカン公会議の『現代世界憲章』は、わたしたち人間は本来互いに深い連帯性によつてつながれていることを教えています。人と人とのつながりが神のみ心になつた状態にならない限り、わたしたちは救われてはいけません。また『現代世界憲章』は、人間とは神のつくられたこの世界の中で生きるものであることを思い起こさせます。この世界とのかかわりが神のみ心になつた状態にならないければ、わたしたちの救いは完成しないのです。このように考えていけば、この「わたし」の救いはすべての人の救い、そして世界の完成と切つても切れない関係にあることがわかります。教会が人々の救いのために働こうとするとき、人々の現実と生活に深い関心を寄せ、この世界を神の国の秩序に変えようと努めるのは、まさにこの、人間の他者とのつながり、世界とのかかわりという真理に基づいているのです。したがって、キリスト者の社会問題への

かわりには、単なる人間のわざである社会運動とは区別されます。人と人のあるべきつながり、人と世界とのあるべきかわりは、神の恵みなしには決して達成されないからです。そして、神の恵みはイエス・キリストの十字架と復活の神秘を通してわたしたちに与えられています。したがってわたしたちは、謙虚に神の前にへりくだり、必要な恵みを祈り求めなければなりません（『現代世界憲章』1、2、32、34、37、38、39参照。また教皇パウロ六世の使徒的勧告『福音宣教』17〜20、29〜38参照）。

8 現代において「聖」とは何か

本来聖である教会があまりにも深くこの世界にかかわると、教会の聖性が損なわれてしまうのではないかと心配する人がいます。そこでこの機会に、聖なる教会とはどういうことかあらためて考えてみたいと思います。

聖とは本来、神にのみ属することです。聖と呼ばれるあらゆる人、物、事は神の聖にあずかっているにすぎません。神は到底人間がとらえることのできないお方ですから、神の聖ということも大変豊かで深い内容をもっています。神の聖はいろいろな時代や場所においてさまざま豊かなイメージを提供してくれます。かつては荘厳なグレゴリアン・ミサや金色の輪を頭上に輝かせている聖人、ステンドグラスと高い尖塔のあるゴシックの聖堂等が聖のイメージの代表であったかもしれませぬ。その

ことは今日でも否定はされません。しかし同時に、しもべの姿をとり、貧しい人々の友となって歩まれたイエスに従って生きる生き方に神の聖をみることもできます。『ともに喜びをもって生きよう』はこのような聖性のイメージを示して、日本の教会のカトリック信者もキリストにならって生きるようにと励ましています。教会がどのくらい聖であるかは、教会がどのくらいキリストの姿を示しているのか、によつてはかられるからです。

9 第一回全国会議をどのように評価するのか

第一回全国会議が日本の教会の宣教にどのような役割を果たしたか、ということとは後日歴史が明らかにしてくれることでしょう。司教団はその成果については自ら判断を下すことは尚早である、と考えています。第一回全国会議について、「第一回全国会議は完全無欠なものではない」（『ともに手をたずさえて』本文5参照）という言い方をしていますが、それは第一回全国会議自体が誤っている、という意味ではありません。「第一回全国会議の趣旨・精神と基本的内容はキリストの教えと教会の伝統にかなうものであると認めた」（『ともに手をたずさえて』本文2）のです。完全無欠ではないとは、例えば、第一回全国会議はすべての問題に触れることができなかつたので、学校や施設等についての議題を割愛せざるをえなかつた、あるいは扱つた問題についても、時間をかけて十分に検討できなかったので、誤解されやすい表現、よく整理されていない点、考察の不足している点がある、現時点で

日本の教会を開かれた教会にするためには具体的にさまざまな方策があるが同時にすべてに取り組むことはできないので何かを優先的に選択しなければならなかった、ということでは、また、専門の神学者の集まりではなかったたので専門的な神学論議は行われなかった、発表された文章の中の神学的説明が十分ではない、会議に時間をとられて十分に祈りの時をとれなかったなど多くの不足していること、反省すべき点があります。だからこそ、司教団は多くの方々の援助、協力、意見、批判、要望等を歓迎しているのです。

10 典礼について特に述べたいことは何か

『ともに手をたずさえて』は最後に典礼について一言述べています。そこで典礼についてここで補足になることを付け加えたいと思います。

(1) 典礼法規について

ここでは典礼法規のことが触れられています。わたしたちは典礼の規則に対していかなる態度をとるべきでしょうか。両方の極端を避けたいと思います。

一つの極端は、しゃくし定規、機械的・形式的に典礼法規を順守し、法規を守らない人を一方的に非難する、という態度です。他の極端は、典礼法規を無視し、勝手気ままに典礼を行い、典礼の精神と意義をないがしろにするという態度です。司教団が勧める態度は、典礼の精神、意義をよく学び、

その上、典礼法規の意味、趣旨をよく理解し、その精神を生かすためには法規にも柔軟に対応する、ということ。現行の典礼の総則を学んでみると、そこにも豊かな具体的応用の可能性があることがわかります。その上で新しい工夫を試みるべきです。

(2)人々の心の琴線に触れる典礼について

「人々の心の琴線に触れる典礼を生み出す努力」(『ともに喜びをもって生きよう』参照)については、信者共同体の中でさまざまな試みが勧められます。司教はその試みを暖かく見守りながら、必要な指導をする心構えをもっています。

第一回全国会議の提案の中に「社会に目を向け、宣教のエネルギーとなるような典礼」(『ともに喜びをもって生きよう』「答申」柱Ⅲの提案2)という表現があります。これは典礼を宣教の手段にする、という意味ではありません。ここでいう典礼には三つの場合が含まれていると思います。

①参加した人が信仰の喜びを新たにし、おのずと内からわきあがる恵みの力に促されて、日々の生活の中で信仰のあかしをせずにいられなくなるような典礼。

②まだ洗礼を受けていない人が、キリストとの生き生きとした出会いを体験し、キリストを信じるようになるような典礼。

③キリスト教をまだよく知らない人にも福音がわかりやすく伝えられる場となるようなミサ以外の種々の典礼(結婚式、葬儀等)。

『ともに手をたずさえて』の呼びかけにこたえ、関係方面の方々と協力して、このような典礼を生み出す努力をしていきたいと考えています。

おわりに

福音宣教は三位一体の神のわざです。しかし、神は宣教に際しわたしたち人間の協力を求められます。弱く不完全なわたしたちですが、その神の呼びかけにこたえ、神の道具となつて、神の国の完成のために努力していきたいと思えます。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお、点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

ともに手をたずさえて

第一回福音宣教推進全国会議の理解を深めるために

1989年12月15日発行

頒布価 100円(本体97円)

日本カトリック司教団教書

発行所 **カトリック中央協議会**

東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

〒135-8585 ☎03-5632-4411
